## 2004 ANTILLA APAIL (UMIRA 1031h



## 隣の部屋

階段を上って来る足音が聞こえる。

僕は横になって目を瞑り、両手をいっぱいに広げてその音を抱きしめた。ドアノブを廻す音、それからドアが開き、パタンと弱々しく閉められた。

僕がこの白い壁の向こうの彼女が…隣人が彼ではなく彼女だと知ったのは偶然だった。 一年半ほど前、前の住人が引っ越して行き一ヵ月後に誰かが隣の部屋へ越してきた。 引越しの翌日、新しい隣人は僕の部屋のドアをノックした。

その日の僕は何もかもがわずらわしいという気分だったので、返事をしなかった。 ドアのひし形のガラス窓から明かり残れていたから、僕が中に居るのはわかったはずだ。 あの頃の僕は毎日が憂鬱で仕方がなかった。今とは全然、まったく大違いだ。

隣人がどんな人間なのか気にもならなかった。ある朝、僕が一階の郵便受けに手紙を受け取りに行こうと部屋を出ると、何気なく通り過ぎようとした隣の部屋のドアが開いていた。そして小さな可愛らしい置いてブーツがあるのが見えた。それで、"彼女"だとわかった。その日から、僕は毎日壁の向こうの彼女の音を感じ続けている。

彼女はきっと踊り子だ。アパートの古くて重い木の階段を、鳥みたいに軽やかな足取りで上ってくる音。 夜、押し殺した声でリズムを口ずさみながら、ステップを踏んでいる音。そして大きなため息。 ある日などは、ステップを踏みながら一人で泣き出してたっけ。その泣き声で僕も悲しくなった。 ある晩は、やっぱり軽いステップで部屋中駆け回っていたかと思うと、 なんだかすごく嬉しそうに笑い出した。 クククって。 彼女がとても愛おしくなった。 僕は、恋をしたんだ。 音だけじゃない、今では彼女のすべてが見える。

でも、今夜の彼女は少し様子が変だ。さっきから家具をガタガタさせて、何かとてもあわてているみたいだ。今夜は今までとはどこか違う

いつの間にかこんなに日が高くなって、すっかい眠ってしまったらいい。
"彼女 "どうしただろう? 僕は、いつも以上に気を使って身なりを整え、ドアを開いた。
アパー Hは静かだった。隣の部屋のドアは開け放たれていた。そこには造りつけの家具以外何も残っていなかった。あの日見た可愛らしい小さなブーツも。もちろん彼女も。
彼女が去ってから、一ヶ月が過ぎる。

そろそろ次の隣人が入る頃だ。

さあ、今度の隣人はどんな"彼女"かな?

## MUM

鎌倉の猫事情 第四十二話

幾日も雨が降りやまないと 我が家には険悪なムードが漂ってきます。 何しろ猫達は雨が好きじゃないのです。

たしかにこんなにぬくぬくと人間と同様に屋根の下で暮らしている のですから 当然かもしれません。

大達といったら、大抵コンクリートのたたきのガレージが軒先かで、 鎖でつながれて、頭や尻尾にかかる雨はどうこかしのげるものの、 風と一緒に吹き込んでくる雨や、降り続く雨がしみこんだ床の水溜りを よけながら、丸くなって寝ているのです。

まあそれに比べて猫達は、家の中でも一番温かくて、皆を見下ろす見晴らしの良い場所を陣取って、しかも不機嫌そうに寝ているという始末です。 今、我が家には猫がなんだかんだで10匹同居しています。

グーニーとスィーピー、長女すみれ、長男クウ、春先に生まれて、それぞれの里親への旅立ちの為、ひと立ちの準備中である赤ん坊が む・・・・なんということ。いくらなんでも多すぎます。それにこの降りやまない雨。だれも出掛けようとせず、狭いところに大小の猫がひしめきあって暮らしているのです。

騒動のもとはいつもグーニーです。よちよち歩きを始めた赤ん坊猫が、興味本位に不機嫌そうに眠るグーニーのそばへ近寄って行くと、それを感じた黒々としたグーニーの尻尾がピクピクと右へ左へ動くものですから、面白がってよたよたと尻尾にじゃれついていきます。するとますますイライラした尻尾はいっそう古へ左へと大きく動くものですから、赤ん坊はますます興奮して尻尾を追いかけます。しかも頭の方から別の赤ん坊が近寄ってきて、なんとグーニーの顔に、小さな手でパンチしているのです。あぶない!と思う間もなくグーニーが頭を持ち上げ、目の前にいた子猫にカァッ!と口を開けて噛み付こうとしています。かわいそうな子猫の体はグーニーの頭ほどの大きさしかなく、カッと開けた口に白くて小さな頭は飲み込まれようとしています。助けなくちゃ!と行こうとすると、その子猫はよたよたする足を踏ん張って、まだよく見えないだろうと思う母さんゆずりの青い目を三角にして、怒りに燃えたけだもののようなグーニーに立ち向かおうとしているでは、ありませんか。それを赤い目で見下ろしたグーニーは平静を取り戻し、もう一度体を丸くして、今度はいたずらされないように、尻尾を巻き込んで寝なおすつもりのようです。

子猫たちはどうからちっとも怖くないようで、まだ懲りずにあちこちから攻めるようと

試みています。さすがにこれは危ないと思い、子猫たちの 首をつかんで安全なところに放り出してやりました。

そうするとそんなことはすっかり忘れて兄弟で遊び始めます。ふう・・・と安心する間もなく、今度は何が原因なのか、突然クウとスヨンの兄弟喧嘩が始まりました。

あ~ ぁ 早く天気になってよ!

次回は子猫たちの旅立ちの日です。お楽しみに・・・ to be continued

